

(2)国・千葉県の動向

第五次環境基本計画

2018(平成30)年4月に閣議決定された国の「第五次環境基本計画」では、「地域循環共生圏」の創造に向けて、「SDGs の考え方も活用し、環境・経済・社会の統合的向上を具体化する」ことを掲げ、環境政策を契機に、あらゆる観点からイノベーションを創出し、経済、地域、国際などに関する諸課題の同時解決と、将来にわたって質の高い生活をもたらす「新たな成長」につなげていくとしています。

また、環境政策の具体的な展開では、6つの「重点戦略」(経済、国土、地域、暮らし、技術、国際)を設定し、さらに、重点戦略を支える環境政策として、「気候変動対策」をはじめとする6つの分野が示されています。

プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律の制定

海洋プラスチックごみ問題、気候変動問題、諸外国の廃棄物輸入規制強化等への対応を契機として、プラスチックの資源循環の促進等を総合的かつ計画的に推進するため、「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」が2022(令和4)年4月に施行されました。

2019(令和元)年5月には、ワンウェイプラスチックの使用削減、プラスチック資源の分かりやすく効果的な分別回収・リサイクル*の推進、海洋プラスチック対策などが盛り込まれた「プラスチック資源循環戦略」が策定されました。

食品ロスの削減の推進に関する法律の制定

食品ロスとは、本来食べられるにも関わらず捨てられてしまう食べ物のことです。日本では2018(平成30)年度に、約600万トンの食品ロスが発生したと推計されています。

食品ロスの削減に関し、国、地方公共団体等の責務等を明らかにするとともに、食品ロスの削減を総合的に推進することを目的とした「食品ロスの削減の推進に関する法律」が2019(令和元)年10月に施行されました。同法第13条では、区域内における食品ロスの削減の推進に関する計画として、「市町村食品ロス削減推進計画」の策定を努力義務として定めています。

また、食品ロスの削減を目指した国民運動「NO-FOODLOSS プロジェクト」を展開するなど環境省、消費者庁、農林水産省が連携して食品ロス削減に向けた取り組みが実施されています。

第四次循環型社会形成推進基本計画

2018(平成30)年6月に閣議決定された「第四次循環型社会形成推進基本計画」では、「第三次計画」で掲げた「質」にも着目した循環型社会の形成、低炭素社会や自然共生社会との統合的取り組み等を引き続き重視するとともに、環境・経済・社会の統合的向上に向けた重要な方向性として、「地域循環共生圏形成による地域活性化」、「ライフサイクル全体での徹底的な資源循環」、「適正処理の更なる推進と環境再生」、「循環分野における基盤整備」などを掲げています。

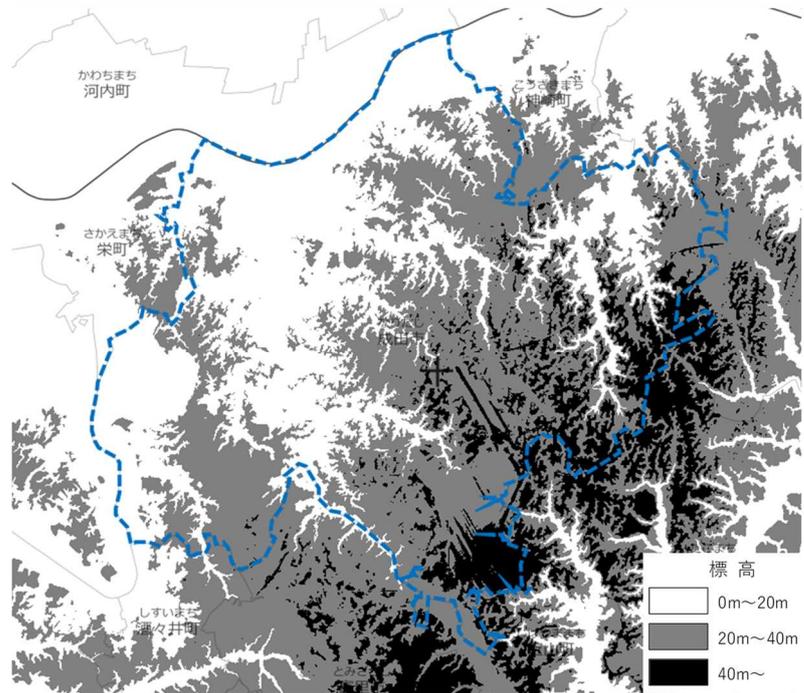
(3)自然環境

① 地形

地形は、印旛沼周辺の低地や北総台地の平坦地、周辺の丘陵地や台地斜面地からなる。標高約1～42mの低海拔地となっています。

利根川周辺の低地は、数千年前に入り江であった場所で、海面の後退とともに細く延びた谷が形成、谷津*(田)と呼ばれ稲作などに利用されています。また、谷津など丘陵部と低地部が接する場所には湧水が多く、昔から生活用水などに利用されてきました。

成田市の地勢概況
※国土地理院(電子国土 Web)の地図を加工して作成

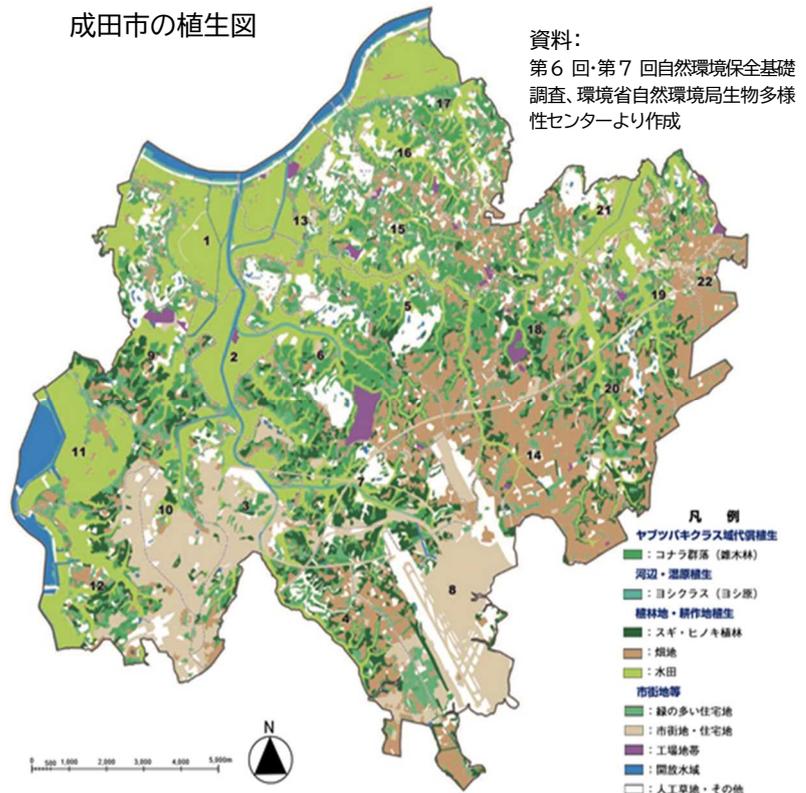


② 植生

植生は、ヤブツバキクラス域に属し、温暖な気候やなだらかな地形という立地条件から、古くから人々に利用されています。

利根川や印旛沼沿いの低地帯や谷津は水田、北総台地上部は畑地、丘陵地斜面は用材林やかつては薪炭林として利用が行われ、自然植生であるスダジイ・タブノキの林は社寺林などとして断片的に残されていますが、森林の多くはコナラ林などの二次林やスギ・ヒノキの植林になっており、これらが基本的な郷土景観、原風景を形成しています。

成田市の植生図



資料:
第6回・第7回自然環境保全基礎調査、環境省自然環境局生物多様性センターより作成

※ヤブツバキクラス域:植物社会学上の分類で、暖温帯の雨量に恵まれた地域に生育する常緑広葉樹林帯のことで、関東以西では標高700～800m以下で発達し、里山の植生帯となっています。

重点プロジェクトⅢ

3Rによる循環型まちづくり
—循環型社会づくり—



(1)プロジェクトの目的と重点的取り組み

私たちが日常生活や事業活動を行っていく上で、廃棄物の発生は避けられないものであり、今日の物質的な豊かな暮らしをつくってきた大量生産・大量消費型社会の進展に伴い、大量の廃棄物が発生し、**食品ロスなどの問題も生じています。**

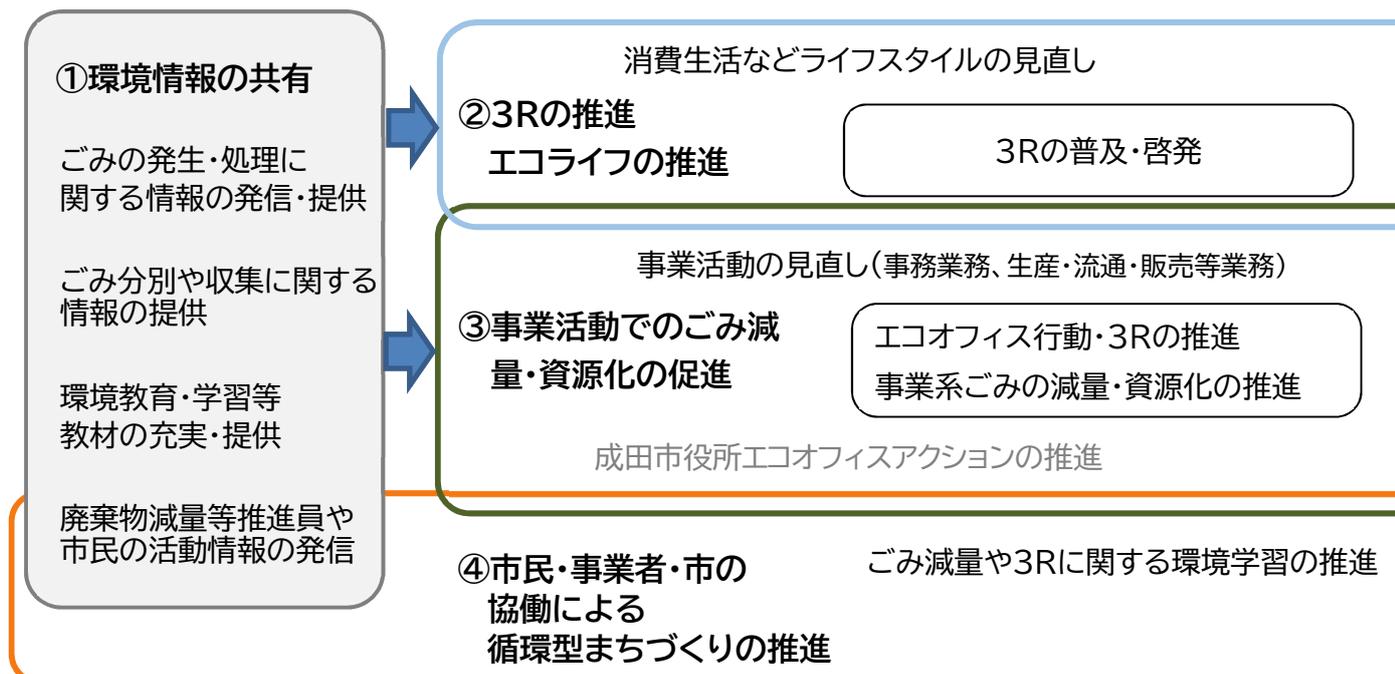
また、自然界で分解されにくい**プラスチック等**の物質や汚染をもたらす物質なども増え、廃棄物の処理・処分には多大な費用がかかっているほか、私たちの身近な自然や生活環境から、地球規模の環境にまでさまざまな影響を与えています。

そのため、私たちは、ごみの発生・処理に関する情報やごみの減量・資源化についての課題を共有し、ごみの発生をもとから減らし、再利用・再資源化し、ごみとして最終処分されるものをゼロにしていくなど、さまざまな分野から資源が循環利用される社会を実現していく必要があります。

本計画では、ごみの減量・資源化に向け、「3Rによる循環型まちづくり」を重点プロジェクトに位置付け、市民・事業者・市との協働により、3R(発生抑制(リデュース)・再使用(リユース)・再生利用(リサイクル))を一層進め、循環型社会の構築を目指していきます。

また、3Rの結果、どうしても発生する廃棄物については、エネルギーとしての有効利用をはじめ、環境負荷の低減を図るなど適正な処理・処分に努めていきます。

● 重点プロジェクトの重点的取り組みのイメージ



重点プロジェクトⅢ 3Rによる循環型まちづくり

(4)市民・事業者の取り組み

市民の取り組み

- ごみカレンダーなど市が提供する情報の収集や、ごみ処理施設への見学などを行い、ごみの減量、3Rの必要性、ごみ処理の実態を知ります。
- 詰め替え商品を選ぶ、レジ袋を断る、**使い捨てプラスチックの使用を減らす**、不要なものはおもらわないなどリデュースを徹底します。
- 繰り返し使う、修理して使う、フリーマーケットを活用するなどリユースを進めます。
- 各種リサイクル法で決められたものは、その手順に沿ってきちんとリサイクルします。
- リサイクルできるものは分別を徹底し、資源回収に出します。
- リサイクルによる再生品などを積極的に選択して使います。
- 分別区分に従い、ごみ出しをします。廃棄物減量等推進員活動に協力します。
- 生ごみの水切りや堆肥化、食べ残しをしないなど、**食品ロスを減らし**生ごみの減量化を進めます。
- ごみのポイ捨てや不法投棄はしません。地域での清掃や環境美化活動に参加します。

市民団体の取り組み

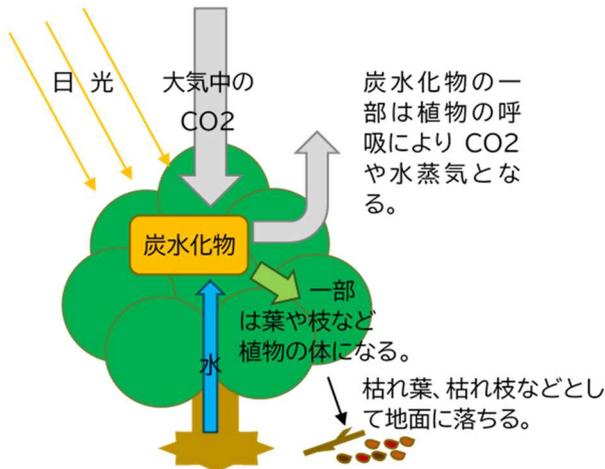
- ごみ問題に関わる情報の市民への提供や市への提案を行います。
- 市民・学校・地域・職場でのごみ減量に関する学習や実践を進めます。
- ごみの分別やごみ出し、3Rの推進を市民・事業者に働きかけます。
- ごみカレンダーや新たなしくみづくりを提案し、作成に協力します。
- 地域での資源物の集団回収に協力します。
- 市や地域で進めるごみの散乱や不法投棄防止活動などに協力します。

事業者の取り組み

- 産業廃棄物の減量・資源化を進め、マニフェストに基づいて適正に処分します。
- すぐにごみとして排出されるものを作らない、使わない、売らない、また、分別しやすくする、回収するなど、市の3R推進に協力します。
- **食品ロス削減の取り組みを行います。**
- 各種リサイクル法に基づくリサイクルを進めるほか、事業者間の連携によるリサイクルの仕組みづくりを進めます。
- 再生品の利用など、循環型社会の構築に貢献します。
- 事業所での省資源化・再資源化を進め、産業廃棄物を含む事業系ごみの減量を進めます。
- 事業系ごみの家庭系ごみへの混入を防止、産業廃棄物は法に基づき適正に処理します。

コラム：森林が蓄積する二酸化炭素(CO₂)

CO₂が森林に吸収されるということはよく知られていますが、吸収されたCO₂はその後どうなるかご存じでしょうか。ここでは簡単に説明したいと思います。植物は大気中のCO₂を取り込み、光合成により炭水化物をつくります。この炭水化物は、一部は植物自身の呼吸によりCO₂に戻って大気中に放出され、一部は幹や枝葉となって植物の体(植物の体の量を「現存量」といいます。)に蓄えられます。



若い森林では植物の成長量に比べ枯死していく量が少ないので、現存量は増加していき、蓄えられるCO₂も増加します。またCO₂は、枯死した植物やこれらが腐った土壤中の有機物の形でも蓄えられますが、昆虫やミミズ、菌類などはこれをエネルギー源として呼吸に利用し、再びCO₂として放出します。

時間が経ち森林が成熟してくると植物の体が増える分、呼吸によりCO₂に戻る量も増えるため、現存量の増加量は減っていきます。そしていつかは植物の体に変わるスピードと枯死していくスピードが同じくらいになり、世代交代はあっても全体として現存量に変化がない状態に至ります。CO₂の行方に着目して見ていくと、大気から吸収され炭水化物となったCO₂は、一部は植物自身の呼吸によってCO₂となって大気に戻り、一部は植物の体になった後枯死し、昆虫や菌類などの呼吸に伴いCO₂に戻っていきます。森林が成熟するにつれ、光合成によるCO₂吸収量に呼吸などによるCO₂排出量が近づいていきます。森林において炭素が大気、植物、土壌などの間をどのように、どこへ、どのくらいのスピードで移動していくかなどは生態系に係る基礎的事項であり重要な研究テーマとなっています。地球温暖化における森林の役割を考える上でも、森林で吸収された二酸化炭素がどこにどのくらい貯留され、最終的にどうなるのかを理解しておくことは重要です。

森林の二酸化炭素吸収量の推移

